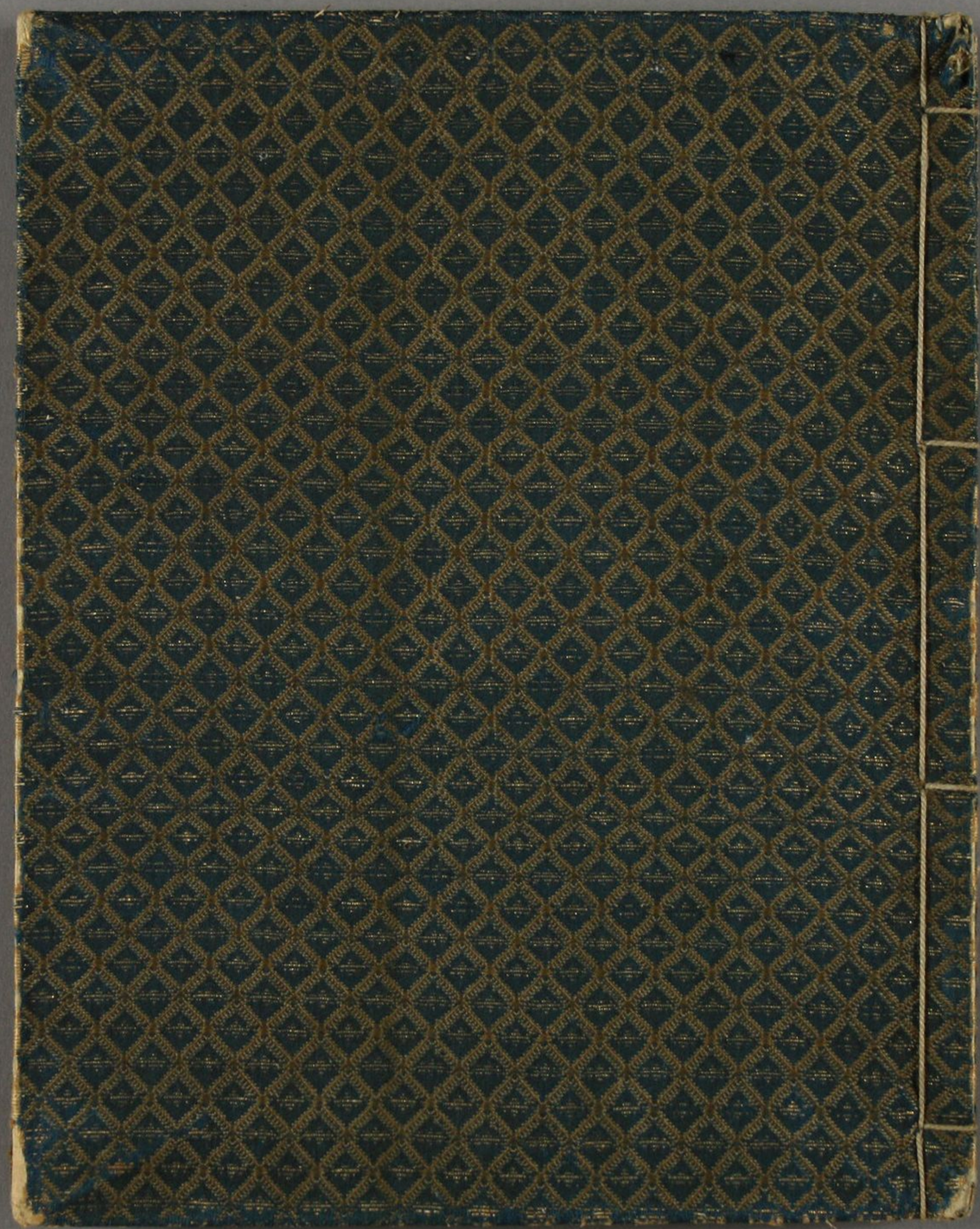

なとこゝにそなへいふ日記といふ物
をいとなむてんみしるしてする
ものはかりのとゝはかりのたつゝ
おほゆるこゝろのいぬるはよ
かとて数ゝのよゝ伴さくかよ物
てかきけくある人あるこのよと
物いはせたてゝれいのこゝも
みなこゝをへてけゆるとゝもてすむ
ゆくもよわいこゝゝ毎ゝ乃る今、

天理文庫

所へ見つまかしたこれをしぬ
をくわすにて二月よくらへいる
人くちむしわるしの思ひて彩
光ようとこくしたくしろう
ちよ来ふゝぬ
廿二日よいたみのくるまてとたむ
うう顔をいりあちちのときさ
はあちち地なしとむしのさしむし
粉かみーなくも忘れあきていと

あやしくさほうみのほとわまて
河されあへて
廿三日やきのやすのかといふ人あわ
この人くるかちるまーをいを
たふをのもあるこれ
ろそくはきやうまてむ面の
てれむしたてるかみくるやあく
むくる人のんのたねとていア
くとてスをちるんあるあく
はちまろちるむきくるこれくものは

よりてほむるうたをあらは
せり四日海師しりのうれしゝ
よいてやすらあるとあるとかはい
まてをひしれて一文字をさる
さらぬものかあるて十文字
ようみてあるふ
廿五日かみのさちようひよあ
みきてきうあるわよくれていわて
日えとひようひとよとくあるふ

やうまてあゝよゝ
廿六日ゝかみのしちまてあるまある
しゝゝわて高ホまてよもの
かはをしわかゝうこゑあけて
いむりわやすとうたあるを毛海
うとともへいひあつわゝ
かゝうえこのようえかさやすと
うあるのかみのよめわゝる
みやこいてきみよあとしとこうあを
こうのひとちくわれぬるのれ

とちんあわれかへるさきのみ
乃よめわれふ
さるさへの浪地をとをくゆきうて
われよへきたたれちるちくよ
とんへくのもあわれとはつき
もちるへてどのくいいてさきの
かみいまのちえとりよおて今
のあるーとさきのち手とわったー
てゐたことよ
いてよりわ

廿七日たほつよあうらとをさて
こきいたをかくれるうちよ京て
うさはるあーをんかこくよく
てよわりようせすかたこのこえ
のいてちいるきこをとれとなま
ともいたを京へかへるよをんかこの
おきのみてかちたふるあるんく
もえさへよこのあもしよおふ
むとのかきているせるうく
みやこへと思ふものかちきを

かつぬ人のあれたちわれわ
ゑるぬよた
あるものとわすれて松ちき人を
いはらとふうかるーわれる
と伊いるるあひいるよかこのさきを
いふとこんよかみのたゝゝゑこと
人これのれさけるよとこをてをひ
きていろるむアをるてわつれるき
ををいふかみのうちのんくの
ちるこのきるるんくるこゝろ

あるやうよいたれのめくかくわつ
れくくいひてかのひとくのくちあを
もこゝもるてこのうみへよて
よちいくせるうふ
むーと思ふんやとさるをあつの
うちむれてこゝわれたきるれ
といひてあわれいとくめて
ゆくんのよあわれる
ほなさせとろこひきるぬわつみの
ぬのきんをきみよんるれ

といふおひこまかちとわ物のあるれ
きーしてをのれ　さゝをくゝロ
はれたはやくいちじとてきちみ
ちぬ限もあきぬへーとさわけい
舟よのわすんとすこのむわよある
ひとくむアフ　よはきてかゝの
うゝとはぬまつたちきいふ
又ある人すくてよちすれとかえう
ふるといふかくうゝふよあちやの

ゆくえ　ゆくゝえ　ゆくゝ
ぬとてふなることよりいうとる
とまるあちたゝのときさねうち
ちれの五月ひゝとんぐをいき
たわ
廿八日うゝとよわこきいてくたほ
みれとをふこのあひよちやく
のみのこゝくちれ千みねさうけよ
き知ともてきてあねよいねうち
ゆくのみふ

廿九日たほみなとよりかへ
り　あわちへてとうす白散さ
きくちへてをきうめさう
あるようわ
元日ねたすとすれば白散を
あるものよりはとてあちやうる
けちさめわれたれよあき
すさせてうみよいれてえのすな
なわぬいをあらめもちうめと
すからやうのわもちきくる也

をとめををさをあゆの
くちをのみうちふくのくちを
をあゆをふくのくちを
ふたみやこのみうすりはやうる
こへのうとのらくへなたのかよ
しかうえうあらいうる
とていあへする
二日ねたすとすれば海
時ものさけをこせる
三日たすとすれば海

ねたしはすとたうしんやあんん
もとなす
四日はあけたゝえいてさゝさき
はゝさけよきゝ知さてたつねさこの
からやらよゆもてくるへよ彩一
をたあゝていさけわさせさに
ものもなすよきわーきやゝなしと
まくるこゝちす
五日は波やさはたねたすー所
よあわんゝくゝうんとゝゝりよく

六日きのこのこと
七日よるわぬたすーみはとよあわ
ゝふたおたむさなるとたへとかし
なすさて浪のしるきのみそこ入る
かるほとよ人ゝ家の池となある
所よわこゝをたるてあるよわたき
めてかたのもうみのもとゆとも
おりひつよるいつけてをこせふ
をわれてゝゝをたゝらせる
うゝあわてのうふ

あさちふのくへすーあれた水もき
池よりつみ川るわりれわれり

いとしかーこーこのいけといふた所
の名をわよきへ人めむとこよつきて
くるわて牧みるちわれわこのすう
えたの物てくみれへくよわるはて
よくれれたあきみちて名ちこ
とをたはつつみをうちてうみを
さへむとへうてちみてはへー
かくてこのあひるとむほうわ

ふわりこそくせてきこる人
てのちとてやいてたのいてむ
こめへうよゆむとたをふんあわ
てちわれわとかくいひてちみて
音川ちることうるへいひてよ
ぬるうう

ゆくさる音と白浪の聲はわ
をたれてちむわわやすこ
とてよめるいとたほこるへ
をてきこる物よわさうは

いくあらんこのうちをこれれ
あくしれうれともえとわもかへて
せをきいへきこへをゆれこと
これをのみいくうわをのみくひ
てよありぬこのうぬさこ
ゆくなといいてさちぬるへの
このわらはちるえるまいふさ
古ぬこのかへせんといふたとん
きていとたきとうれよみ

てむやくよみいへくたやいて
といふまくすとてくちぬるへ
をさちてよさんとてもとめるを
ゆあけぬとまやかていよりち
てもくいくよむしるといふかき
かちてふこのわらはさすまん
ちていたまいてとへているふ
ゆくへもとさるも神のすみくふ
みきくのみこえぬれさわれ
とちんよめるかくはいふものうて

しりれたまやあらんいとおもしろは
ちかうはこゝまでてんなりより
せむたんか字きさまに御はして
あしくもあれいつまもあれさまあ
うはやらじとてをそれしぬめり
八月さしたることありておかたまし
ところちかこよひ月さうみよ
ていることれを入てちかひのきこ
の山のそまりていれすもあらん

といふうふちんたほゆるそし
うみつまてよましかえちすみ
ちるちさへていれすもあらなんと
そよみてましやいすこのうをと
思いてあるへのよめりける
　なる月のちるくみれたあすの河
　いはるみれとえうみまさりけるとや
九月のはしとめてたほみちとよわ
かはのともわたてはじとてこき

いてくれつこれ
はうひのうちてとて人をくわよ
くるくるなるよ藤原の
ときさね構のすゑひろせへの
四位ひさうちむみちよりいて
きうひ日よりわこかこをを
くるこの人々ろんさーある人ちう
名こよひとくの者のきんさーい
このうみまもおたとうさるつこれ
まいまたこきたちわてゆく

これをつくんとてこの人
とをたををもきるかてきゆく
はるくうみのちとわるとすれる
人をとをくちわぬ舟の金人
悪敢ちわぬきーよといふこと
あるへー舟よ思ふとあれと
かをあーかしとこのうふをい
こちとよーてやみぬ
思やるんたうみをわつれとも
ゆみーちかーすやあるこ

かくて宇宙の松原をゆき来く
すのまつのかすいくすはくいくち
とせへるちとしらんもとともよ
浪うちよせ枝とよはるすとひ
かふかたしへしと尺るまたへす
てあるへのよめるふ
八わるせてれのうれとよすしるふ
ちよのとちとすいふつるちる
とやこのうこてくところを尺るまえ
すさうたかくあるを尺つこきゆ

くはよく山と海とみなてれ紫
きてすえんうと尺えまして
てけのことかちとわのんまさ世法
ゆのこもすうたぬていとんたうき
はしてをんなてあるすこよ
かうをはきあていねをのみるふ
くかくむりてあるこわちとはは
あちうふいてすとともたと
つなすのうふうふ
てるのまよてすねをてちく

わすきすてきるくはひさる
ちをたやまちるうんきうとめ
やうふんかはやよじへのうな
ゐをうれせよこえじうことを
して城きのわさをてせも
をてこはをのわうよこはちわ
うはたほうれとかうにこれうを
人のわふをきてうみてある
れとしんてすこうちぬかくて

ゆきくうてとまわよいうわ
たきうれひと記とわうめひとわ
あるうちすうん地あーみーてと
のとこのーうてひろうわぬ
十日ふてこのちえのとわるとりぬ
土日おうつきてよ舟をいくーてむ
石はをふ人みれまねうねそ
うみのおりやうとうこうて月
をうてすーひんうをえきわる

かるあひまよみれよあり
あひれいのことをしてひるよ
なわぬいとしねといふ所よきぬ
わきわはこの所の名をきて
えねといふ所えわのえねのやよ
やあるといふはくたさきわは
のことをれえんくわふはよあり
くるわはをんこの字をよめる
はをよてをよきく所えねをえ

ふうことくよみやこへものれ
とういるをとことをんをいて
やく京へもれと思ふんあれえ
このうよとよあねとけよ
と思てんくわすれすこのえねと
いふ所とふるえのはいてよう
みしの人を思いて作れ乃
はようわすくふはして
えくのかをくくをはくわ
しはよ人のかすねをあるこよ

かゝるてかゝるへくちる
といふことを思いて人のよめる
老中よ思ひやれとこをふる
たもひよさきるたゝいちきれ
といひてちん
十二日あめふるふじときこれも
ちうあねのをくれわーちう
しほよわひしんつるきぬ
十三日のあつきはいさかるあめ

あるはーあわてやみぬめこれ
かれのあみちとせんとてあるちの
よろーき所よたわてゆくうみを
ひやれて
くもみる浪とてひゆるあさもか
いつれうみとひてるへく
とうこうよめるさてとうあ
まわれく月たーしーしー
舟よのわたーめーはよわ舟は
くれるこくよきてぬきまれて

うみの波ちてといてする
のあかけよとつてほやのつ
さのいすー数ーあそいをう
んよもあらぬたきよあてへせ
ける
十四日あつきよりあめふれた
すー所よりとれりあなきみ
せちへさうしものなれた
むさはよりのちよかちとわきふ
ちわらわーさいよせよちれ

よねをとわかりてたちふれぬ
かるることなちあちぬかちとわ又
うひもてきてちよねさけなと
くふかちとわ家ーきあるな
十五日きふあちきかはるくち
たーくなりのあーれたのき
ふちとよりくふてつあちへぬ
るいくてよ日をふれたんく海
をなめてるめのわらはの兵

きてたつめたくみるふねと
なみとく思ひとちるやあらん
いふひなきものいへるよく
よはうく
十六日ねみやねくおかたな
一所よりとされわてうみよ
浪なくしていたりうみさきとふ
とこえわくんとのみちんたちぬ
ねなみとまやむへくもあらな

ある人のこの浪くつをえんてよめる
うた
霜くもりをうぬ方といなねを
なみのなくよゆきてかくる
はて毎よりわーー月よりふか
てよくつあわいつよちわよくち
十七日くもれるくもなくてあつ
きはくよいともたもしろくね
舟をいくてこきゆくこのあし
くよくものうへうみのうこと

たちてとくよちんあわりる
じてもむしのなとこたたら
かへちみのうへのはをあねたを
ふうみのうちのうちをとくいる
ゐじきてされるまきりる也又ある
人のよめるうち
みれうこの月のうへもうこ舟の
さたるさうるくかつちるうち
これをきてある人の又よめる

かけろれく浪のうこうるひさうの
ううこきわうるわりわりき
かくふあひうるあやうやくあん
ゐあひうるゆくうかちとうう
くうきくもよくうよいてきぬ
風あきぬへうみあねへうて
じといひて舟かへるこのあひ海
ありぬいとわひ
十八日おたちる所よあうみ

あらしにたく舟いろさこのとさわ
さかくみなとちかくみれども
いとたもとろかねともくるる
られたちまちとたもほうに
なとことちくにやちまやあしから
うちをいふへて舟もいくさて
いろいろちれたくある人のよめる
伊勢のちのよるいそはの年月を
いつともわうぬゆきのみちる
このうちつねはせぬ人のとも也

又人のよめる
風よる浪のいろいろひすも
春とうらぬ花のみちはく
このうちをすこしよろしと
きて舟のをはしるたきを
月ころくきんやちよよめる
雪浪をこと雪の花をは風ろ
よせて人をたうへてちる
このうちを人のちるといふを

ある人きてあらわしてよめりける
うたよめる　きのつらゆき
ちぢのいろにみるものはあれど
ふやうちわうらぬしいとけ
しきあきくてたすけねとも
えさねとすかりわとも　えよみは
へかりくるへきふさよかくいひ
かけて　ゆきてのちよくいちし
十九日　あきかれいろ舟いさ

廿日きのふのやうにして舟いさ
数みれんくうれへちけくふ
しくんもとちかりまとて日の
へめるかすをとりいくうくつるみて
かとかふれすよひとこそ
れぬへいとわひいもねす
そつの月いてよりわ山の端と
ちくて海のなうよりいてくる
かやうちるをみてやむ事の

仲麿といひし人ともこ
ゝよりわかれてかへりきなるはよ
舟にのるへき所よりてかのくに人
むさきのくにむさしのくにわれわれみて
かゝこのかゝうつるつきをとりる
あのよやあかんとつのよの月
いけるさてゝうあわるその月と
海よりいでくるこれをみてゝ
仲まろのぬし　わかくよりかゝる事

をなむ申せよりわ申よむこひ
いまゝくかみなすゝもの人もかや
うよわれわれみよんこひもあ
りかなるひとあるはよハよむとそ
よめりけるうゝ
あさうちなゝめわさけうねゝ
かすうちなるみのはのやはて
いて月うとゝうよめりける
かのくにんきゝるはゝうわたち
えんうれともことのこゝとこゝもよ

さゐをかきいてここのことは
はるへるんをよいけせれた
んをやきてうくわりむいとなし
のほうよちんめてくるそんこと
こゝくとはことくおふものをね
月の歌くたちことちるへくをハ
人ゝんしおゆゝことやあゝん
はていまろのみを思やゝてある
人のよめるうゝ

みやこまて山のくるゝ月をね
浪よりいてく浪よこそいれ
廿日うのはくのわよ舟伊こよ
みをんゝゝゝよるねいはこれをゝ
わゝ春の海よ松のこの栄を
ちわるやうしまるあわくるれは
ふきの顧よよわてやあむ
ゆとあるよきゆいてきてこ
きゆくこのあいるつくわを

いきてくるわ〳〵はあわうれい〳〵
ふなうた
おほこうくるの方へ入やる
れわうちはあわとーたてて
かへやとうふあくれちする
うふうふをきてこきくるよ
くろとわといふ鳥いくのうへあり
海わをわうのいくのそとよ浪
ろくうちよりかちとわのいふや

くろき鳥のとよーろき浪を
よとうといふうのことくちるとよ
おくれとやいふやうようき
こえうる人のちとよあくれて
どうむるちわかくいひつゆくよ
あちきみちる人浪を入て
くよよわくーめてかいろくむる
せむといふちることをたふう人
よ海の又たうろくれくかるも

みれどけぬちくうちやうちく
海よりあるゆちわくわ
わくみのの雪というへの白浪と
いたれさきわたきこうさもわ
かちとわいへ
廿二日よむへのとさわよわこと
はわをくひてゆくくうよ山谷
ゆくこのたくうわちるをのわふ
年よわたたさはくうあるこの

わくは舟をこくまよ山ちゆく
とこゆくをうこうあやしきこと
うをうよめるうのくふ
こきてゆく舟よてへはあはきの
山さへ拾くをまつくくすや
とういるたさちきわくはのか
ちくくにつくふ海あくけ
にていうよゆきまわちみの花
はくわあるくへのよめる
浪よのみえとつよきけとうふ

ゆきと花とよまうひとふ
廿三日りてりてく きりぬこのわ
さかいてくのたたりわあわといへて
沖ほとりをいのる
廿四日きのふのたち一所也
廿五日かちとりのきりの毋あと
いへて舟いりさよかいろくをひく
といふとりてんぢきこゆ
廿六日まことよやあんかいろく

をふといつて東中さう舟をい
りてこきくるみちよりむけよ
所あわかちとりてぬさうふ
ほうすよぬさのひんーつち
れてかちとりのやてさつる
ことはこのぬさのちるかるよみふ
ねすみやうこうめうさへと
やてうてさつるをきてあるめ
はうはのよめる

わらつみのちかうの沖よたむけする
ぬさのおひいせやまさるあらし
とうよめるこのほとよ風のよけ
さいたかちとわいいてこうてゐ
ねよおあけるとよんふうのを
とをきてわらはもたきも
いたーっとたもへくるやあんいふ
くよんふこのちよ沖のちの
ふうめといふ人のよめるうら

おもふ風のぬきぬるはゆく舟も
ほてうちてこうれうれ
とうていけのとよりそいのる
世日風あさ浪あらしなる
ねいくさにこうれかこくおけ
くなとこうちのかうるを見を
乃うめくみやことをきなとい
あるる市のさ市をきてある
をんなのよめる

日をくるまもあり雲ちらく月をみやこへと思ふみちのくるゝ

又ある人のよめる

吹風のたへぬうきちりこちれハ
おみ地くいとくるゝわゝち
えむとしハやすつさくきて
てねぬ

廿八日雨もすこしはやすけさも
廿九日あねいくしてゆくゝと

てゝてこきゆくためのちくちる
をゝくてハをかゝれくゝふハ
ねのハちゝくれくきくすむ月
ちれく京の子日のといいて
松もかちといへとうみちちれハ
かくくくをんちのかきていふ
せるうゝ

たはつれふく子ハかあちふハ
うみまつをくよひうまものを

とういへるうみよりてねのりふ
るてていへあるへ又ある人の
よめるう
ふるわとわるもつるかはの
わるこきわるるうよるれ
かくいひてこきゆくおもひてき
とこえよ舟をよせてこやいつ
ゆくひとわくとはのとはわといい
えりわむしうとさといいひふ

とこえよ数みるるこの舟よ
はるわるをかいひくく
むしうはあるのちのちのくは
るうあなるあくれといひてよ
めるう
年こえをすみ一所のすもたへ
きよる涙をもあくれとうる
とういへる
世日あめ風ふるよかいそくくよる

おもてきせさちやうときこえて東中
こうやう毎をいくしておこの
みとをわうる東ちやうれて西
えんうもくえうなとこをんな
かくく弥仏をいのりてこのみとを
わうりぬうこうのはこうやうぬ
しまといふ所をすきてたち
かくといふ所をわるかくい
きて伊つみのちやうといふとえ

ていうりぬ仏海よ浪ふく
まくものちし弥仏のめくみかう
あれるうこうふ毎よ乃り
し日よりかうあれこみうか
おほうこうぬうよちうよりを
いまくいたみのくすきあれて
かいうく知ちに
二月一日おしの山おめうる
むすはこうやうやみぬれはい

はみのちゝとゝふ所よりいて
こきゆくうみのうへきのふのこ
どくよりちるみえなくろさき
乃まつたをつてゆく所の名く
くろくれのいろくあたいろの
ちるみくゆきのとくるかひのいろ
くすくゞよ五ーきよいゞひと
いろろゝゝぬこのあひるふ
くくこのゝゝとゝふ所よりつるて

えきてゆくかくゆくあひるあ
ゞ人のよめるうゝ
そはくけくこのうゝなみ
たくぬはくうみをかゝみと
いゝれゝゝくさゝむ
又ゐおきみのいくくこの月ゞ
てちりめるこゝとおけきてくゞ
しきよりへすて人ゝいふを
とてんやわよいへる

むく毋のつきてその日をき春の日を
よろづいかまてそれわれくてよろづ
きくんのたとへるやうおろたく
ことちるとむろうよいるへ
あちきみのかくくえねわいた
してよしとたとへることをろ
そころきくへとてたくめきて
やみぬよくうよれちみさうれ
くとくさわぬ
二日あめはやまなむとといよと

ちうう弥仏をいのる
三日うみのうへきのみのやうな
れくく毋いろさよはのあくこと
やさねくきしのちみさちくる
こうれよはしてよめるうく
をてよわてかひきぬくたちつる
なくくのうまをぬのぬちすわしら
かくてしくくれぬ
四日かちとわしふはくものしき

てれくさあるといひてゐねぶ
さびちぬきれとも元ねるよ
るみれくすこのちとわくは
もえはうぬかるぬちりをわ
このとちのくまよくさくの
うるくきかひいをとたちち
かれくくしうの人をこひ
はくゐねるる人よ来る
よる浪うちよせちんわうる

ひとわすれいたりてひるむ
といへくあるひとをすて毎
のんやりよある
忘ひえんきせらるを
こゐるをよしかるみとなる
とちんいへるこのめよくたや
なさちくちるめてたまちく
すもあちんを人いくじや
されとしこかほようきとふ

やうもあちなかたち一所より
口をふることをかけきてある
をんなのよめるうた
てをひてさしむさもしらぬ
いたみよりくしとくちより
口こんへよりる
五月はかくていつみのち
よりをはのとちをふまつ
てらめもたるくちこれれ

くるしきれくよめるうた
ゆけとゆかれやられぬいはくしむ
はしはのうちちきてのうつ
かくいたはくるほとよ毎とく
こけりのよきうとをもよかせく
かちとちあまこともよいく
み毎よりたほせふちちおさきの
いてこぬさきよつまてやひ
といふこのことはのうこのやうちく

かちとりのをのつくりのことはちち
う地とアとくうはさへよわたふ
のやうちることいふとまもあらに
きくんのあやしくうめきても
いむつるれとてかきいるせわく
けよみてもしーあるちちわくち
きふ浪ちふちとんぐいねと
ゆよいのるしーありて凡ちえ
ぎくいまかとめしかめて

あるふ所あり京のちうはくよりこ
むのあるよあるわらはのよめる
う
仲のちくるかさとふをあやに
かもめさへくるみとんゆう
といひてゆくあいこよいうはと
ふとこうのすわくたしくて
くまへとたしくて又数みとうのわく
りをこきゆくあるんへのよめるう
いアんてうオをもきちわる佳の歌
乃

枕ようさきよわれくへよりち
むりへひとのてくひとりかくはも
わすれねてよめる
数みのえよ毎さしよせよ草
さるーあちやとつみてゆくへく
とちんうにしつよわすれちしと
よてあしてこひきんちしは
しやすめてへとこふるちしよ
せしとちるへかくいひてちあいく

くふあいしるゆちちくれふ
きてこけともくきちへてきま
してきてちとくうちはめ
面かちとわのいくこの住吉の
明神くれいの神てかし
き初てたくすとくいまめく
元のさてぬさをしてたちた
へといふいまようひてぬは
せいまるかくいまれもく
凡やていやふきよいやしちよ

かせなみのあやふれくかちとち
ふいくくぬさくくみんのいねい
こふねもゆうぬちちなかうれ
しとむもひたふへきわいさつち
たへとふちふいわふよしたりて
いろはせしとてまれこもこう
ふふつあれくひとつあるこうみを
ふいすつるとてうみようちくめれ
くくちなしされくうちけりよ
うみくかみのたもてのとちぬ

れくあるんのよ沈るうく
ちくやふる沖のんのあく海よ
かみないれてかつみつるれ
いくく数みの江わすれくきーの
ひめまつなといふ沖よくあくよ
かしめもうつりくかくみよ沖の
こうろをこうくくつれかちとち
んくく沖のみんちち
六日みなつくーのもとちいてく
よはつきしてかくーよよいるみれ

ひとくさんれんきれひく
ひよてさあてくよんこふふ
ふつれかのふちるひのあいち
のまのちほいこみやこちくちち
ぬとふをよるこひてふちるこ
よちかくちさもふしてかくういる
いつくといふせちつるちよいふ
あこきるけてみ毎きよちち
いとなひのほうちる人のいつれい
ひとくあやしるこれうちるよ

こちちやむふれきみいくめ
てふれちいしくうしみう
ほよくるすもあるれといひる
七月ふすちよ毎いちこちて
こきのほるよすの水ひて ちを
わつふ毎のくほることいとうを
かるあひくよふれまみの病者
をとよちこちくしき人よてかう
やうのとさくるきちさちくり
かれとあはちくめのうる

めてみやこにはこりにきやあと
かくしておやしきうゐねり
いくせちのうふ
きときてく河のちち地の水を詠
舟とわつ才とちるつむふふ風
これくやさひをすれくよめる
ちるへ〜ひとうくるとのあら
ねくいまひとつ
とと思ふ舟ちるやよはわるめよ
みつのんのあさきちちちち

このうくみやこちちくなわめる
よろこひよふへ教ていへるれ
る〜おはちのこのうよおと
わりねきいくさらまとの
ちとくやーるうちちよるよる
わてねよけち
八月をほ河のちちよなつみて
どちちひのみすきといよほとちよ
とまるこよひふなまみれいの
やまひおこちていくちやむ

あるひとあさましうちるものを
きゝうよねして返と数なとこ
ともひろうよいふちりいひりて
をつるとやうやうのと一所く
よあわりふせちみ数れていな
ふ用
九月ゝもとおさよあゝぬうう舟
なひきつのほれとも河の水を
ゝれくぬさわるのみるぬさるこの
あむうよわくるのとさわのあれ

の所といふところあわよねいなを
とこへはをこるひつかて毎ひ
きのほるれきけの院と云所
なみつゆくうの院むしを思
やりてみれくすもしろかりる
所せさわへなるをうよく松の
本とあわちるのはよくむ
めのくれさゝちこるひとくの
いくこうれむうしるくきこへる

所也故これいのみこのたほんを
をよ故あわてゝのちひゝの
中將のよのちゝよふへてはゝみ
はゝ為ゝはこゝろのこゝろのとけ
うゝまゝといふゝよめるところ
あわゝゝいとふあるひと所よく
ゝるうゝよめわ
ちよつゝる松よくあわといまへの
こゝのさゝしさゝかりゝさわゝ
又ある人のよめる

きみこひて世をふるやとの梅花
むゝのうゝ松よをいゝる
といひつゝみやこのちゝをよ
ゝこゝ世ゝのほるかくのるゝ
のちゝよ京よりくゝちゝはす
みれ人よりもちわきいゝ松わ
しくゝてゝるうめる物とも
あわあるゝ人へみれ毎のとゝる
ところゝよゝをいゝきゝたを

乃至教これを入てじゝのこの
ちくかきゝきるよへまゝて
なゝわゝを有てかつる人のみを
あわゝもちくてくるゝちゝ
といいてゝなきゝるちもこれを
きゝていゝあゝんかうやゝのとも
うゝとこのむとてあるゝもあゝ
さるへゝもろこゝもこゝも思を
よゝふぬはのわさとゝこゝよいゝの
といふとこゝろとさる

十日教こゝることあゝてのちゝは
十一日あめいあゝかゝるゝあゝてやみぬ
かゝてさゝのちゝるゝ東の方は
山のよゝこゝはゝるる字入て人へゝと
つくやはゝの文とゝふこゝれをきゝ
てよゝんこゝひて人へゝ字ゝうゝみゝて
まつる山さきのちゝみゝうゝれ
しきゝとかゝまゝわゝ寺ゝこゝゝ相應
寺のほゝとゝわゝよゝもはゝ舟を
とゝめて

どくはくこむることあり　このて
のきてほとりは柿たほくあり
ある人このやなきのかけの河の
てこようつれる字みてよめるう
はれ浪よするあやをゝあをやき
かけのいとてをゝとてアるの
十二日山さきよあり
十三日なほ山さきよ
十四日あめなるゝふくるア京へと

てよやる
十五日はくるアめてきたり毎
のむつはよあねより人の家
ようつるこの人の家よりこるや
うしてあるこのあるし
のまゝあるのよきをアるよ
うしてたもいろゝよかり
と教家のこ人のいそいはまけ
なるよぬやかちち
十六日ゝのようはつゝ京へ

のぼりついてよ人はくやさき
めこひつの五そをよりのあは
ちのくもりはてあり行うち
ひよこゝろをゝゝぬとゝいふ
するかくて京へいくよりはう
よてひとあるゝうちかちゝよ
しきあるまゝうきわ我ちたち
てゆきゝゝはよちくかつらぬゝ人
くとくあり行るこれるもかつちと
数よりよちゝて京にくいくと

たもへくいゝきゝとせぬちとよ
月いてね桂河月のあうきよゝ
わるゝくのいはくんくのいく
この河あすゝ河よあうねくちせ
あゝよかはゝさちけちといひて
ある人のよあるゝう
久方の月よおいるかつらは
てこゝるかゝもかくさちゝち
又ある人のいる

あさくものるうちつる桂河
てをひてもわるうぬるれ
ふあるへよめうち
桂河わんもかよくれと
たすけ山さるへくちち
京のうれきあさわよ雪もあ
すうてたほる東ふて所くも
みへ数京よいうもてうれ
家よいうてかとよいるて

月あうれくいとよくあうあア
ふゆきてしようもさしていはは
りくてこほれやれるいつよ
あつけうつる人のんもあれる
ちうりあうきこてあをひ
とついのやうちれくのてみて
あたうれる也さるはふようと
ようものくさへよえさせてうこよ
ひうこと　こわうようものとい
　　させる

いとくつくみゆれとんさうはせ
むとさはていけゆいてくなまう
みつけるゆあちほとるれとあ
りきいはとせむとせのうちよチ
とせやすきよりんかへくなく
ちりよりちいアれいるアす
しれるたほうこのみれあれる
ゆくあられとうんくいふた
といいてねとちくたりいこ

むーきうちちよこのいへるて
まれーなんをこれるとよ
かつねくいくはかちきあ
をんもみれこうりてのうる
かるうちよおほうちきふ
つけーてひうよんしれる
んくいちりるうふ
むアれもかつねをわやと
こまつのあるなみうちき義

ふほうの数やあらんくるん
みしんの松のちとせまつ
とをくかすきわれせしや
わかれくちこまきこと
おほうれとえいくさとまれ
かうすれとくやわてん

ん
ぬんのちきうつろ
こまつのあるチみる
うちなるとそいつる
なはあるあやあらん
きふくるん
みしひとのつのち
とちまつのみまつは
とはくうれしまわれ
えきしやや

わすれくさ千ー
さとおほうれと
あとくはあとよし
うくまれとくやうてん

みを知て手跡を賛歌寫面を
謀詠し單分他手跡多梅主筆
可謂奇怪 虫損

文暦二年 来五月十三日 老病中
雖眼必盲不慮之外見紀氏自筆
本蓮華院寶荒本
竹紙白紙 不打 玉堤 高一尺一寸三分許 廣
一尺七寸二分許紙也廿六枚 玉軸
表紙續白紙一枚 端節折返不立竹 玉紐
有外題 上左日記貫之筆下
其上横和哥非別行定行よ出し
節有願字哥下云歌字ヲ云後詞

不堪感興自古寫ゝ昨今二ヶ日
終功　桑門明靜

紀氏
延長八年仁左字
在國載五年六年しも
策年四甲午五年年事ゝ
今年歴三百一年紙不朽

槙ゝ字又鮮明也
不讀得所ゝ多只仁本也
有朱印